

## 第2章 サール

M村をはじめて訪れたとき、筆者は村人たちに自分が大学院生で、調査のためにやって来たことを説明して家々を廻った。それを聞いていた一部の若者たちは筆者のことをサール（先生）やジャパン・サールと呼ぶようになった。当初から熱心に村を案内し、村の習慣などについて教えてくれた彼らは、村外にある高校に通うエリートとも言える青年たちだった。

滞在し始めて数ヶ月たち、やがて「あなたもこの土地に馴染んだ」と言われるようになるのにしたが、それまで直接話しかけず外からショーと筆者を呼んでいた人たちの多くも、筆者をサールと呼ぶようになった。

サールは英語のサー（sir）に由来する敬称だと聞いたことのある筆者は、その言葉に居心地の悪さを感じ、筆者は一介の学生に過ぎないのでその呼び方はやめて欲しいと頼むと、一部の人はダイ（兄）やバイ（弟）と呼び、他にあだ名で呼ぶ人も現れるようになった<sup>1</sup>。

だが、それでもなお、サールと呼び続ける人も多く、筆者が村を歩いていると「サールが来た」というのがよく聞かれた。

ところが、サールは必ずしも筆者のことを指すとは限らなかった。最も頻繁にサールという言葉が使われるのは、学校の先生（マスタル *māstar* N.）、つまり教員、教師に対してだった。

### 2-1. 学校のサール

昔は給料を貰う仕事をするのにも読み書きが必要なかった。昔は皆、読み書きができなかった。できるようになったのは学校がつくられてからです。

学校について話を訊くと、こうした語りがよく出てくる。だが、よく訊いてみると学校ができる前にも、周辺の地域を含めてごくわずかだったが、読み書きができる人はいたそうである。当時はそうした読み書きのできる人をバイダール (*bahīdār* N. 文官の階級の1) と呼んでいたとM村の人びとは言う。

自分の父親はバイダールだったと語る50代の男性、ゴンデ氏に話を訊くと、彼の父は徴税役のゴウルだったが、自分よりも地位の高いミジャールより読み書きが堪能だったため、村人たちは、彼の言うことをよく聞き、従っていた、ということだった。

こうしたバイダールの時代を経て、M村に正式な小学校ができたのは、1978年である。それまでの経緯を、自らも読み書きが堪能なゴンデ氏に続けて訊いた。

筆者：読み書きは、T氏（近隣のタマンの男性）から教わったと聞きましたか。

ゴンデ氏：違います。自分の父親からです。私の父は歩いて1, 2時間ほ

どのところに住むグルンから教わりました。グル (guru N. 導師)、バイダールですよ。お爺さんは読み書きを知らなかった。

学校をつくることになったのはT氏 (この地域のかつての村議でのちに郡議になる) が、ある日この村を訪れ「ここは村も大きいし、学校をつくらなくては駄目だ。つくってしまえば、あとからサルカリ (sarkārī N. 政府の, sarkār N. 政府) が来るはずだから」と言ったのがきっかけです。そののちB兄弟 (タマンの男性) に村人が謝礼を払い、教えさせていたのです。全部で285Rs.くらい払っていました。ある家は2Rs.、他は1モホル (mohar N. 1ルピーの半分、50 paisā) といった具合に寄付を集めてです。その後、G先生 (職業カーストの男性) が来て、3ヶ月ほど経ったところで「もう自分たちでは謝礼を払いきれない」と政府に申し立てに行き、政府の学校として認められたのです。パンチャーヤットの時代になってからのことでした。

このようにM村の人びとは寄付金を集め、教員を呼び寄せてまでして学校をつくり上げたのだった。そうした熱意の裏には何があったのだろうか。学校がつくられた経緯や当時の教育の状況をT氏に訊いてみた。

T氏：「M村の教育は私が始めました。まずK氏やS氏に教えました。」

筆者：「誰が始めようと言い出したのですか。」

T氏：「私が自分で考えて、自分で教え始めたんです。当時からM村の人たちとは懇意にしていたので、生徒ひとりあたり3モホルの月謝をとって始めました。あれは1956年か57年の頃でした。私は当時18歳くらいでしたから。私には最初父が教えてくれました。私の父が、読み書きがよくでき、教えるのも上手だったのです。それから1951年の頃には、個人で勉強を教えているところに行きました。学校は当時郡にひとつしかなく、このあたりで誰も行く人はいませんでした。その頃は、今のような学年もありませんでしたが、当時の勉強は今のSLC (高校卒業資格) のレベルにも決して劣らないものでした。英語は駄目ですが、ネパール語のレベルは高かったと思います。その後、7、8ヶ月間マクワンプールで教えるようになりました。その頃にも学年というものはありませんでした。手紙の書き方、ラージナーマー (rājīnāmā N. 所有権などの権利放棄の同意書) や土地の売買の書類の書き方、訴訟の書類の書き方、そんなことを教えていたのです。SLCを取得するには、国境を越えたインドのパटनाやバナラシまで行かなければなりません。その後、M村では、他に5、6人教えました。」

このように、T氏がM村で読み書きを教え始めたのは、ラナ時代の終焉後、パンチャーヤット制度が始まる直前の時期にあたる。それは、どのような時代だったのだろうか。

## 2-2. ラナ時代からパンチャーヤット時代へ

ラナ政権は、1951年の王政復古とともに実質終焉を迎えた。1959年には総選挙がおこなわれ、ネパーリ・ kongress 党が勝利したが、民主化を要求する党と国王が対立し、結局国王は首相をはじめとする主要政治家を逮捕、国王親政を開始した。その後、1962年に発布された新憲法で打ち出されたのがパンチャーヤット制度である。この制度は国王を頂点としその下にパンチャーヤット（評議会）を国や地方の各レベルに置くもので、パンチャーヤットの議員は選挙で選出される（井上 1986, 佐伯 1986）。

ラナ時代までは、M村（当時はモウジャーだったが、パンチャーヤットの時代には村パンチャーヤットの1区）はキパットと呼ばれ、国家の直接的な統治の外部にあり、国家と人びととの関係はミジャールやゴウルなどの徴税役を通して結ばれていた。徴税役以外の村の人びとは、自ら役所などに出向いて何らかの登録や申請をおこなうことはなかった。もちろん、交易をおこなっていた人びとは、全く外部に触れていなかったわけではないし、交易で媒介となるネパール語での会話は男女とも堪能である。だが、交易の場でネパール語の読み書きの必要性はそれほど高くはなかった。それが、急に国政の状況や政党について知り、選挙で投票し、役所への書類を作成する能力が急に必要になったのである。

パンチャーヤット時代に、学校の用務員として勤めた男性は言う。

パンチャーヤットの頃、皆でお金を出してチトワンからG先生を呼んで勉強し、学校をつくりました。私の場合は両親のブッディ（buddhi N. 知性、理解力）がなく、このまま読み書きできないままだとラタ（愚鈍な）になってしまうと思ったからです。読み書きができれば色々と役に立ちますから。

当時の話を訊くと、このような「読み書きができないと、ラタになってしまうと考えて」、熱心に勉強したとか、学校をつくったという話がよく返ってくる。当時はそうした時代的な切迫感や高揚感が存在したようである。

チトワンからG先生が来て、M村の小学校が公立に移行した当時は、40人以上の生徒が登校するようになっていた。その成果もあり、現在M村の男性で読み書きができないのは、学校に行く前の子供たちと60代以上の年配の人だけである。女子も、何人か学校へ通ったが、家の仕事の手伝い（ヤギの放牧など）のために辞めさせられたり、自ら途中で嫌になって辞めたりして、結局勉強を3年以上続けられたのは2人だけだった。この2人は読み書きに加えて算数も得意で、学校を辞めて結婚した現在でも家で必要なときには夫に代わって計算している。

その後、M村の小学校は中学校も兼ねるようになり、校舎も拡張されて、教師も3名派遣されるようになった。学校施設は充実し、生徒が溢れ活況を呈した。

こうしてサールがやって来て、学校がつくられ、「M村の人びとは他の村よりチャラクだ（calāk N. 賢い）」としばしば他の村人たちやバザールなどの外部の人たちから言われるようになった。

そして村人たち自身のお互いに対する評価も変わっていく。

今は、バイダールとしてはC君がいるね。C君とK君とではどっちがチート (cito P. 知る、わかる) なんだい? C君だね。7年生まで (実際は8年生まで) パザールの高校まで行って勉強していたんだから (70代の女性ハリマヤさん)。

このような学歴を基準とした階層的な見方が村内や村外の人に対してなされるようになった。こうして自らを多少でもチャラク、チート、ブッディがあると考える人は、読み書きできない人やラタを見下すのと同時に、サールを自らの上位に位置する者として見上げるようになる。

サールではない	／	サール
(読み書きできない人／読み書きできる人)		
(ラタ／チャラク、チート)		
(ブッディ無／ブッディ有)		

さらに学校の教師であるサールの上位には誰が位置するのか。M村の人びとが特定の個人を指して「あの人は学校の先生より上だ」と語るとき、しばしば登場するのが「博士」(ピーエイチディ PhD) や「科学者」(バイギャニック baijñānik N.) という肩書きや職業である。こうした知識は、高校に通った青年たちによって村人たちに広められている。「博士」は学歴が最も高い者として、そしてその上の特殊な知識と能力を持つ存在として「科学者」が位置づけられる。

青年たちは、「科学者」について説明するのに、しばしば学校の教科書を取り出す。そして、教科書の鉱物について書かれた部分を示しながら、地中にある金やダイヤモンド、石油などを見つけ出すのが「科学者」だと解説する。さらに教科書のページをめくり「月にまで行く」のも「科学者」であり、そのための「飛行機やロケットをつくる」のも「科学者」だと説明する。このように地中や月世界への旅行が、学校の教科書で提示される最大のスペクタクルであり、それを可能にする知性の頂点が「科学者」だということになる。

ここまで見たように、サールという牽引役により、M村の人びとはチャラクに、すなわちブッディを持った存在、読み書きの能力と知性を持った存在へと向かうようになった。そして、学歴を基準とした知性のランクづけを同時に受け入れてきた。そのような状況のなかで、筆者も学歴を訊かれ、その階層の上位に位置づけられつつ、サールという敬称で呼ばれた、とすることができる。

### 2-3. 官僚、政治家のサール

パンチャーヤット制度が導入され、政治家や官僚たちがM村や近隣の村々をしばしば訪れるようになるが、この人びともまたサールと呼ばれている。こうした職業や役職に就いている人は一般に学歴も高いが、学歴を問うことなく、あるいは知らなくてもサールと呼ばれるので、そうした職そのものがサールと結びつけられているのだと

言える。

ただ、郡や県、国のレベルの政治家や官僚は皆サールと呼ばれるのに対し、村長や村議に対してサールと呼ぶ人を筆者は見たことがない。その意味でこのサールは、村の外部性と関わりが強いことが窺える。

1990年にパンチャーヤット制度が廃止され、議会制民主主義が始まってからは、多数政党による政治活動が活発化し、政治家や官僚のサールが村を訪れる機会が飛躍的に増加した。選挙の公報や決算報告、森林保護を訴える集会、政党の広報集会などのミーティングが開かれ、サールたちはその場でネパール語で演説をおこなう。あるサールは「本日、ご来席の村長殿、区長殿、そしてその他ご来席の皆様、かような機会を頂きましたことをまずは御礼申し上げます・・・」などと挨拶をよどみなくおこない、演説を始めた。

別のサールはある政党の広報として、他の政党が国家予算を浪費、搾取し、さらにインドにネパールの電気を売ったという話題にふれ、パンチャーヤット時代の不正について語り、最後に自分たちの政党なら弱者への福祉や援助を重視して、各村に特別予算を組むと述べた。

森林保護について演説したサールは、インドやシベリアを行き来する渡り鳥の話、インドの森林に暮らすヘビの生態、森林の生態系といった話題を朗々と語った。そして最後には、再び流暢な挨拶の言葉。

ネパール語の日常会話に不自由しないプラジャの人びとではあるが、こうした演説をネパール語でおこなうのは容易ではない。M村の30代の男性で村人からバト（利口な）と言われているSさんは、「このあたりのプラジャたちは、ミーティングの演説が上手くない」と嘆きながら、近隣のバザールに近い村で、他の民族が混住するなかでも村長に選ばれているプラジャの男性のことを指し、「彼は（前出の）T氏にも負けなくらいバトだから、演説もとても上手い。私たちの村の人は誰もミーティングで上手く演説ができないけど、彼らは違う」と言う。

選挙が終われば、演説をおこなった政治家たちは、村の黨員たちにティカ（印）をつける。ラナ家の専制時代にミジャーラがダサインで村人たちの額に付けたティカは、カトマンドゥウや郡庁から訪れた政治家たちがこうした状況で付けるようになった。そして村人たちと握手して祝辞を述べる。さらに「今後も我が政党のためにより仕事を」と話をするが、握手している村の黨員たちはやがてバツが悪そうに横を向いてしまう。それでも構わず政治家は話を続ける。

もちろん政治家たち、官僚たちにも演説の上手下手がある。ミーティングが終わり、家路についた村人たちは、誰が上手かった彼が下手だったと品定めを始める。そして、彼らの学歴について話は移り、誰がバトか、というところに話は行き着く。

家に帰ると、ミーティングに行かずに家で待っていた女性が言う。

村議たちはミーティングに行かなくてははいけません。ミーティングの話をよく聞いて、私たちに話してもらわないと。私たちは何もわからないからそれを唯うんうんと頷いて聞いているんですから。

ここでも、演説が上手い人を頂点とする、階層的な見方が確認できる。演説を聞く

人は、家でそれを待っている人を見下すのと同時に、演説ができる人からは見下される。それによって、以下のような自ら他者を見るのと同時に他者から見られる場所が生じている。

家で話を聴く人／集会で演説を聞く人      / 集会で演説する人  
 (家で集会について話す人) (下手な人／上手い人)

#### 2-4. 開発とサール

ここまで見たようなパンチャーヤット制の時代、民主化の時代は、同時に開発の時代でもあった。ちょうどその時代に人びとは、プラジャ開発委員会 (Prajā Bikās Samiti N. : Praja Development Programme) によって開発 (ビカース : bikās N.) の対象とされた。

Gurung (1985) によれば、プラジャ開発委員会設立のきっかけは、1977年にビレンドラ国王 (当時) が中央ネパールを訪問し、現地の民族の状況を視察したことにある。国王は、「チェパン」と呼ばれる民族の生活の窮状を知り、この民族の教育、農業、衛生、産業を改善する計画を各郡ならびに村パンチャーヤットに立案、実行するよう命じた<sup>2</sup>。その後、チトワン東部におよそ500人のプラジャが集まり、国王が議長となって開発についての会議が開かれたと言う。

1978年には開発プログラムが開始され、プラジャの村々に開発スタッフがやって来るようになった。そして、そのスタッフたちもサールと呼ばれるようになった。チトワン郡ではこうしたサールたちがやって来て、1983年までに穀物の種、野菜の種、農薬、ヨーの木やその他の果樹の苗、竹などが600軒に配られ (Gurung 1985)、その他に子ヤギの配布、手工芸の訓練などがおこなわれたと言う。

M村の人びとは「国王は自分たちを愛して、色々なものをくれた」と言い、当時を思い出しながらこんなネパール語の歌を聴かせてくれる。

私たちの王、ビレンドラ国王、プラジャ・ビカースを持ってきます、ようやく・・・。

人びとは、王に愛着の情を示す「臣民」としての姿をここで見せている。一方、プラジャ開発委員会のサールについての話をすることは、あまりない。村に長期滞在することもなく、開発で何かものを残すわけでもない、開発エージェントの印象は薄いようである。「プラジャ開発は何にもならなかった」と言う人も多い。ただし、人びとにとってビカースという言葉はなじみのあるものになった。そして上記の国王への賛辞とこのような言葉が残された。

私たちはラタ (愚鈍な) だから、哀れんでビカースがきた。

このように人びとはプラジャ開発委員会による開発の対象とされるなかで、「プラジャ」と呼ばれているわけだが、人びとはこの開発プログラムが開始される以前から

「プラジャ」と呼ばれていたようである。

ビレンドラ国王の時代になり開発プログラムが始まって、「プラジャ」と言う名前を（書類などに）正式に書くようになりましたが、その前から「プラジャ」と呼ぶ習慣はありました。

M村に学校をつくる働きかけをしたT氏の話である。また、M村の60代の男性によるつぎのような話もある。

私が子供の頃は、タルーも「プラジャ」と呼ばれていました。チョオバンもタルーもどちらも他の民族から馬鹿にされていたからそれを避けるために「プラジャ」と名づけられたのです。

この「プラジャ」を名乗る人びとについての現地調査に基づく初の本格的な民族誌、*People of the Stones*を記したRaiは、その冒頭で「プラジャ」という名称は「東ネパールから中央ネパールにかけて、チェパン、クスンダ、ダライ (Darai)、クマル (Kumal)<sup>3</sup>、マジ (Majhi)、パルガルティ (Pargharti) に対して用いられている」(1985: 1)としている。さらに、Raiは中央ネパールの東北に位置するドラカ郡の歴史資料を分析したBajracharya and Shrestha (1974)が、「プラジャ」をタミ、ハユに関係づけていることを指摘し(1985: 1)、Michailovsky and Mazaudonのハユの言語についての論文(1973: 136)から、「1924年の奴隷解放以来、それまで奴隷化可能とされた民族に対するプラジャ・ジャート (Prajājāt) という言葉が法律のなかに見られるようになった」という記述を引用している(1985: 1)。Raiは、この名称がさらに遡ったマッラ王国の時代から、ある種の民族名として用いられていると結論づけ、さらに人びと自身が「ゴルカの王に彼らの王が負けて以来、プラジャと呼ばれるようになったが、最近になりチェパンと呼ばれるようになった」と言っていることを紹介している(1985: 1)。

Höferはムルキ・アイン(1854制定の国の法典)の分析をおこなった論文のなかで、「プラジャ (prajā N.)」はムルキ・アインのなかで貴族、官僚に次ぐ身分で、奴隷や使用人などよりも上に位置する「ドゥニヤ (duniyā N. 人民, 民衆)」の代わりとしても使われる言葉であり、様々な民族、カーストを含む「平民 (commoner)」のような枠組みだとしている(1979: 121-4)。

このように「プラジャ」という名称の起源ははっきりしないが、これらの証言から見れば、「プラジャ」の名称は国家との関わりのなかで奴隷ではない存在を示すものとして用いられてきたようである。さらに、そうして「プラジャ」を名乗っていた人たちの一部に対し、パンチャーヤット時代に発足したプラジャ開発委員会により新たな民族範疇としての「プラジャ」が重ねられるようになったのだと考えられる。

パンチャーヤット時代には、プラジャ開発委員会以外の手による開発もいくつかおこなわれている。その成果として最も人びとの生活にとけ込んでいるのが、1982年頃ユニセフによっておこなわれた簡易水道の設置である。このユニセフによるプログラムでは資材調達と技術指導はユニセフがおこない、作業は村の人びと、というふう

に双方の協力により進められた。パイプやセメントの扱いを訓練した数名の人にはその際賃金が支払われたが、その他の作業はすべて村人みずから無償で提供した。そのため、「建設当初には、沢山の村人たちが水道なんてなくてもいいのにと行って労働提供を嫌がっていた」。それまで利用していた湧水がそれほど遠くなかったので、当初はそのような負担への不満も出ていたらしい。それでも結局簡易水道は村内に12個作られ、人びとにとってなくてはならないものと認められるようになった。水道の修理係が村内に2名定められ、水が出なくなるとすぐに修理に向かわされる。修理係は見返りに各所帯から年に一度穀物を受け取っている。

この簡易水道設置の際しばらくM村に寝泊まりしていたサールたちの記憶は、彼らが下宿した家の人たちにとっては楽しい思い出である。

美味しい料理の作り方をよく話してくれました。夜ごとに遅くまで歌をうたい、いろいろな話をしました。

特に「水道をつくるプログラムが終わっても、また私たちに会いに来た」のは、多くの村人が何度も繰り返し話す、忘れがたい記憶となっている。

このようにパンチャーヤット時代にはより良い生活の導き手、国王から送られた援助の媒介者として何人かのサールたちがやって来た。しかし、それも永くは続かなかった。その後、前述のように1990年に当時のビレンドラ国王がパンチャーヤット制度を廃止し、ネパールの国家体制が多数政党制に転換されるのにしたが、開発のあり方も変更を余儀なくされたのである。プラジャ開発委員会は解散し、外国の政府援助とネパールのNGOがこれを引き継ぐことになった。

## 2-5. 森林の消滅とバザールの出現

M村やその周辺の村々で開発がおこなわれる一方で、村の外、深い森を抱くチトワンは急激にその姿を変えた。森の大木が広大な規模で伐採され、マラリアも撲滅されたのである。チトワン郡開発局の話によれば、移住計画はネパールのビクラム暦（以下B.S.と略す）2013年（1956-7年）からアメリカの援助で始められた。それと平行してマラリア撲滅運動がおこなわれ、B.S. 2019年（1962-3年）までには撲滅宣言が出されたという。

当時、アメリカの開発当事者たちが、このプログラムをはじめとしたネパールの開発をどう捉えていたのかを示すものとして、Fujikura (1996) の報告がある。Fujikuraによれば、開発の中心になったUSAIDの局長は、「ネパールほど、近代的な世界の波に曝されていない開発途上国は、ほとんどない」として、ネパールでのこの一連の開発計画の場を「開発の実験室」として捉えていたという。また、その教育計画のアドバイザーも20世紀型の小国用教育システムを作り上げるのに「ネパールは教科書的な機会」を提供してくれると満足感を示していたという。開発の裏で、ネパールはアメリカによって、小さく、純粋な、非近代的な国家として見つめられていた (Fujikura 1996 : 1-2)。こうして、森の奥から見つめるジャア（トラ）やイギリス東インド会社の眼は消えることになったが、それに代わってアメリカの開発エージェントの眼



が同じ場所に暮らす人びとを見つめるようになった。

開発事業はWHOと共同でおこなわれ、ラプティ渓谷総合開発計画と呼ばれた。広大な農地が非常な安価で売られ、この地域への入植事業が進められた。さらに農業試験場、病院、大学などの教育施設が設置され、バラトプール、ラトナナガルの2つの市 (nagarpālikā N.) が成立した。1964年から69年には交通の要所ナラヤンガールとマクワンプル郡の郡庁ヘトウダとのあいだも舗装道路で結ばれ、上記の2市を繋ぐ国道が完成した。舗装道路の起点になったナラヤンガールには1960年頃まで商店が2, 3軒しかなかったとM村の人びとは言うが (しかも営業は乾期のみ)、開発の進展とともに商店が延々と連なるチトワン最大の商業地へと変貌を遂げた。

この間、チトワン郡の人口は爆発的に増加し、1954年の42,833人が1961年には67,882人へと58%増加、その後1971年までには183,644人へと10年間に約170%増になっている。さらに1981年までには259,571人 (10年間で41%増)、1991年には354,488人 (同37%増) と人口は増加の一途をたどり、40年足らずで8倍以上に膨れ上がった (CBS 1967, 1975, 1989, 1997)。この間のチトワン郡の人口増加分からネパール平均の人口増加分 (ネパール全体の人口増加率をチトワン郡の1954年の人口に掛け合わせたもの) を差し引き、この間のチトワン郡への人口の流入を試算すると170,000人以上になる。

こうした状況のなか、プラジャの人びとにも移住の話が何度か寄せられたという話を、開発にかつて携わった人やプラジャの人びと自身の口から聞くことができる。

あのときにはマラリアの心配もあり、チトワンに移住する話は断ってしまいました。今ではとても買えない土地を買えるチャンスだったのを、惜しいことをしました。でも当時はブッディ (知性) がなかったんです (M村の50代の男性)。

ちなみに、ラトナナガルにおけるプラジャの所帯は、全2,556所帯のうち2所帯、14人 (PDDP 1996) である。

プラジャの人びとを囲い込んでいた森は、かつて植民地主義からの防波堤の役割を担っていた。その脅威がなくなるのと同時に、「開発」の力によって森林は切り取られ、その空白に他の地域で暮らしていたネパールの人びとが招き入れられた。

こうした開発の流れに乗ったプラジャの人びとは、ほんの一握りであった。M村の人びとも、買い物や交易のために低地に行くと、かつての深い森がバザールや街に変容した様子をただ眺めながら通過していく。人びとと姻戚関係にあたるプラジャの人が暮らす村がバザール化し、バザールに住む身内を持つという現象もおこったが、それは同じプラジャを「バザールの人たち」と「パハード (pahād N. 山地) の人たち」に分け隔てることに繋がっていた。

## 2-6. バザールと人びと

それまで塩や鉄、食器などの買い付けのために、徒歩で1週間ほどかけてインドの都市やカトマンドゥまで出掛けていたM村の人びとだったが、山を下りて2, 3時間の

地域にバザールが形成され、そこで塩を購入することができるようになり、重い塩を背負って持ち帰る負担は文字どおり軽くなった。鉄もそれまでは自分で購入したものを鍛冶職人のもとに持ち込み、農具などの製作を依頼していたのが、鍛冶職人が自ら用意するようになり、そうした職人たちが村に持ち込む鍬や鎌、斧などの完成品を購入すれば済むようになった。また、穀物が不足するときにも、最寄りのバザールでコメやトウモロコシ、ムギなどを購入し、賄うことができるようになった。

さらに、そこで手に入らないものも、日帰りで往復できる街で買うことができるようになった。パンチャーヤット期になり、政府のヘルスポストが村々に開設され乳児に予防接種がおこなわれるようになったのに加え、医薬品（インド製、ネパール製）が薬局で購入できるようになり、症状が重いときには病院へ患者が運び込まれるようになった。村から日帰りでできる街には診療所が11カ所、薬局が4カ所でき（1995年現在）、M村の住民はレントゲン写真の撮影、血液や尿検査を含めた治療をその街で済ませることができるようになった。

こうした街やバザールに出掛けるとき、M村の人びとは、交易で荷を背負うとき以外には、きれいに着飾って行く。そのためにもバザールに行き、服を購入しなくてはならない。かつては村に訪れる行商人から腰巻きを買い、あるいはカトマンドゥやインドの都市で服を調達していた人たちは、街や近隣バザールで、インドで大量生産された衣服を買うようになった。それとともに男性のつける下着は禪や腰巻きからブリーフや短パンへと置き換えられていき、バザールで売られるブラジャーを着ける女性も見受けられるようになった。日本製の古着（いわゆるジャージなど）を着る村人の姿もときおり見られるようになった。

女性がつけるノーズリングや鼻ピアスに関しては、工業製品が存在せず、金銀細工職人が相変わらず村に訪問販売しに来ていたが、ビーズのネックレスや腕輪などプラスチック製品がバザールで購入できるようになり、真鍮のピアスなど金属製の工業製品も装飾品に加わった。男性のあいだには、腕時計（ネパール製やインド製、日本製）を街で購入し、身に着ける人も見受けられるようになった。

日用品では、マッチや石鹼（洗濯用、洗髪用）が乾電池（懐中電灯用）とともに買い物の必須項目になり、1995年にはマッチに加えて中国製のライターがバザールで購入されるようになった。ハン（どぶろく）をつくるための容器も以前は素焼きのツボが遠いバザールから割れないように慎重に運び込まれていたが、軽くて気軽に運べるプラスチックの容器が近くのバザールで購入されるようになった。

食料品、嗜好品としては、ビスケット、タバコに加え、居酒屋の自家製ロクシ（蒸留酒）がバザールで購入されるようになり、1995年には工場で蒸留されたビニールパック入りの蒸留酒（ネパール製）が近隣のバザールでも出回るようになった。人びとの多くは交易や買い物の前後に居酒屋に立ち寄り、ロクシやどぶろくを飲み、つまみに肉の炒め煮を注文する。このときには、村の贈与の論理が働き親族同士でご馳走し合うことになり、予想外の出費を伴うこともある。

こうした買い物をしてタルーの村に行くと、家によってはテレビやビデオが待ち受けている。交易を終えたあと、M村の人びとがそれらの映像を楽しむのも珍しいことではなくなった。電気が引かれていないM村ではこうした電化製品を購入する人はいないが、ニュースやネパール民謡を聴くためにラジオ（インド製、ネパール製）を街

で購入する人が増え（1990年には村で3台、95年には10台）、音楽テープ（ネパールの民謡）を聴くためにカセットプレーヤー（インド製）を購入する若者も現れるようになった。1995年には、街では長距離電話や国際電話のサービスの看板があちこちに立てられ、電子メールの送受信サービスをおこなうところもあった。

このような物品やサービスを提供してくれる国道沿いの街まではおよそ徒歩で半日の道のりだったが、1995年にはこの区間の一部にバス（片道運賃12Rs.）が運行されるようになった。途中にある水路に橋が架けられたのである。それまで徒歩で半日の道のりが2, 3時間で済むようになり、M村やその周辺の山村に暮らす人びとも街にアクセスしやすくなった。

それらの結果、交易の途中に食べる弁当も必要なくなった。弁当自体が必要なくなったからである。そして、運賃の支払いに困らない人は常にバスで行き、現金を十分に持たない人はバスが走り去ったあとそれを追いついて歩いて行くようになった。女性は、交易には重要な担ぎ手だったが、運賃をかけてまで行く必要はない、と言われるようになった。

街で手軽に石鹸が買えるようになり、かつてのようにゴウサイ（gousay P.）という木の実を使って髪を洗うこともなくなっていき、マッチやライターが買われるのにつれ、バナナの繊維を火種に火打ち石で火を付けることもなくなった。短パンが街で購入され、ネワールの行商が運んできていた手織りの木綿布もなくなり、腰巻き姿の男性はいなくなった。その結果、こうした古くから使われてきたものの使用は、金銭を持たないことと結びつけられるようになった。

今日は、石鹸がなくなって、お金もないからゴウサイを使っているんです。

医薬品の購入にしても、医療機関の選択にしても、どれくらい現金を持つかで選択肢は違ってくる。服はもちろん、装飾品、日用品、食料、ラジオや腕時計からタバコの1本にいたるまで、すべてが同様である。

「バザールに明日行く」と言うとき、大抵その人の表情は明るい。不安げな顔をするのは、何年かぶりに村を出るといふ女性か、はじめてバザールに行く子供、そして病人とその家族だけである。だが、バザールでの経験は、村人たちに山の暮らしとの違いを痛感させる契機にもなっている。バザールからM村に帰る途中、30代のある男性はこう語る。

お金があったらバザールのサウ（商店主）のようにポッキ・キム（pokki kim P. 丈夫な家、セメントの家 cf. pakkā N. 真正な）を建てて、ペーオ・ナイ（peo nay P. 良い服）を着て、ニュモ・ニュモ（nyumo nyumo P. 美味しい物）を食べて過ごすのに、パハード（山地）で暮らしているから、ずっとこのままだ。

バザールでは、買い手や見る人に品質や価格といった商品の差異が提示される。さらに、それら商品の所有が、民族や居住地などの一定の属性ごとに偏りだすと、特定

の商品のイメージと所有者の属性のイメージとが結びつけられるようになる。上の発言からは、「バザール」という場や「サウ」という職業が高価な物や優越的なイメージと結びつけられ、「パハード」という場やそこで暮らす人には高価な物が所有不可能であるというある種の欠如のイメージが結びつけられているのがわかる。

このように、バザールそのものやバザールで売られている商品は、人びとによって見られるものであるのと同時に、それを見る人を見つめ返し、見る人自身を自ら分類するものになっている。そのようなバザールの眼差しのなかで、人びとの「昔からのやり方」は、所与のもの、自明のものから、金銭など所有の欠如の結果によるものとして捉えられるようになった。

## 2-7. 冷めた学校熱

筆者がM村の学校をはじめて訪れたのは1989年だったが、偶然生徒の登録日に学校へ行く機会を得た。その日は、近隣の村の子供を含め大勢の子供たちで教室は溢れかえっていた。校長によると、生徒の登録数は約70名ということだった。

ところが、数日後授業の様子を見にいくと、登校している生徒は約12人しかいなかった。この状況について校長に訊くと、いつもそのくらいの人数しか来ていないと言う。その理由は、親たちが「子供を学校にやっても高校卒業資格試験に合格しないと職を得られないし、この村の中学校を卒業してから歩いて2, 3時間かかる高校まで子供を通わせる余裕はない」と言って、子供が読み書きできるようになると学校を辞めさせてしまうから、ということだった。登録者数が多いのは「学校に登録すると制服がプラジャ開発委員会から支給されるから」だと言う。

実際、学校を辞めた子供の親に訊いてみると、上の理由に加えて「農作業で忙しいから、家畜の放牧や畑仕事を手伝わせないとやっていけない」ということがあげられ、子供に話を訊くと「嫌になったから辞めた」とか「親に学校を辞めてヤギの放牧をやるように言われた」ということだった。

わざわざ寄付を集め、サールを遠くから呼んできてまでつくられたM村の学校だったが、それに対する熱意はすっかり冷めてしまったように見える。それでも高校まで通う生徒も1995年にはいたが、やはり、高校までの遠い道のりと高校卒業資格試験への合格は難しいと、1年で辞めてしまった。

そんななか、学校に大人たちが集まることがあった。聞けば、日本の援助で新しい校舎が建てられることになったのだと言う。そのプロジェクトを下請けした業者と話し合い、村人たちが建設の孫請けとなった。石を積み、セメントで固め、トタンの波板で屋根を葺き、やがてポッキ（頑丈）な学校ができあがった。しかし、その後も生徒の数は増えることはなく、広くて閑かな教室が残された。教員もひとり辞めて2名になったが、補充されないままの状態が続いた。

その新しい校舎が生徒たちで溢れる日が来た。NGOによる識字教育が始まったのである。教師役は、高校に通っていたM村の青年で、生徒は以前学校に通いながらもやめてしまったり、全く学校に行っていなかった若い女性たちが中心で、彼女たちに数人の男子も加わった。正規の学校の授業が始まる前、あるいは夕食が済んだ頃、大勢の生徒で教室は賑わった。勉強が進み、やがて20歳前後の2人の女性が3年生程度

の学力をつけ、小学校への転入の話も出ていた。結局編入はしなかったが、識字教育のコースは惜しまれながら半年間で終了した。こうして、また学校は閑かになった。

## 2-8. サールへの幻滅

このように教育への熱が冷めていく裏で、学校のサールたちへの熱も冷めていた。学校設立当初から勤務していたG先生が辞めたことも、生徒減少の一因になっているようだ。

以前のG先生は、学校を休む子供がいたら家まで迎えに来て、引っ張って行ったくらいだったのに、今の先生たちは、自分たちが休みで家に帰るといつ帰ってくるのかわからない（実際に学校に来なくなり、免職になった教員もいる）。

G先生は本当に熱心だったけど、厳しいのは厳しかった。

このように印象はそれぞれ異なっているが、G先生が教育に熱心だったことはM村の人たちのなかでほぼ一致した評価のようである。さらに、「G先生は、ここを辞めても、わざわざ私たちに会いに来ていた」ことも多くの人から語られる。また、その後村の外で再会を果たした人もいる。

G先生がここを辞めてから、チトワンに交易に行ったときに遇ったんだ。家に来い、来いって強く誘ってくれたから、行ってみた。そうしたら先生のお母さんが、ロクシ（蒸留酒）もご飯も出してくれた。こっちが遠慮して（恥ずかしくなり）もう結構って断ったら、G先生が「プラジャは遠慮して、すぐに要らないって言うから、要らないって断れば断るほど足してやるのがいいんだ」と横から言ってくれたんだ。それで、お母さんが沢山ご飯を盛ってくれた。彼は本当にここによく馴染んでいたからね。

また、「G先生はバザールで買ってきたカリフラワーやキャベツを、AさんやBさんのところに持ち込んで調理させて、それを家の人にも分けて自分も食べていた」ことも覚えられていて、G先生は「ジャッティ (jatti P. 気前が良い cf. jāti N. 良い) だった」と今でもよく言われている。

一方で、G先生の後任の一部のサールについては、ある10代の青年のこのような話がある。

このあいだ学校でAさんのヤギを解体して、（作業をした人たちで食べるために）血を炒めるから少しだけ油と香辛料、トウガラシを分けて欲しいって頼んだんです。そうしたら「ない、ない」と言って、ほんの一サジの塩と油しかくれなかったんです。ちょっとトウガラシと香辛料を入れればいいだけなのに。彼らは凄くチュチョ (chuco N. 心の卑しい、けちな)

です。そんなだから、今のサールたちには、僕は何もあげないんです。葉っぱとか野菜を貰いに来ても。

また、ある儀礼の日にこのような出来事もあった。

あるニワトリの供儀を伴う儀礼に、あるサールがやって来た。このサールは普段、野菜などを無心に来るとき以外に、村人たちの家を訪れることがほとんどなかったのだから、家の人に「サールが来ていますね」と言うと、「あれは、供儀するニワトリの肉を貰いに来ているんですよ。彼らはクイ(kuy? C. 犬) のようですね」<sup>4</sup>。

この発言の裏には、サールという村人にとっての他者を否定することで、筆者という同様な他者を持ち上げようという意図もあった可能性がある。したがって、それをそのまま言葉どおりに受け取るわけにはいかない。しかし、こうした発言がM村の別の人によっても繰り返されていたことに鑑みると、そこに多少の誇張が含まれていたとしても、その表現を立ち上げる根本にある違和感をM村の人びとは感じ取っていたと言うことはできる。

また、ある女性は、隣村からサールがトウモロコシを貰って来たというのを聞き、「あの先生はいつも物乞い (həy- P. cf. həy- C. 覗き見する) して歩いているね。私も何度もヘチマをあげたり、先生の子供が来ていたときにはトウモロコシも随分あげたけど、私にくれたのは今の今までモモ1個。隣村から沢山貰ってきたのを私に見られて、食べるかいつて言うから、もちろんって答えたのよ。そうしたら、くれたのはたったの1個。2, 3個くれたらまだ良かったのに」と言って笑う。

一方、あるサールは、上のような批判を面と向かって言われ、こう答える。

この村で私たちに求めてくるのは大勢で、応える私たちは無勢です。それに家からこれほど遠い深い山のなか(僻地手当てが支給される)に来て、こんなに小さな小屋に間借り(村人が建てたもの)している人間にどうしろというのでしょうか。家にいるのなら、どんなことにでも応えますが。

このサールが言うのもっともなことだと、後任サールたちの生活の状況に同情し、野菜や果物を「余分があればあげる」という村人たちもいる。また、サールたちに限らず「僕はあげます。お客さんが来たら、それが誰でも」と言う20代の若者もいる。

しかし、こうした「野菜をあげる村人たち」のあいだでも、「気前が良いG先生」と後任サールたちとの違いについて話題になっているのを、筆者は何度か目撃している。そこでもやはりG先生がいかに気前が良かったか、という話がされていた。家から遠く離れた僻地での暮らし、という点では両者は同様な立場にあり、後任サールたちが苦勞していることは認めても、両者のもののやりとりを巡る感覚に大きな違いがあるのは否めないのである。

では、おかずを村人に分け与え、ともに食べるサールと、村人たちにおかずを乞うて歩くサールたちのあいだに横たわる感覚の違いとは何なのだろうか。

前述の村人の記憶、つまり、プラジャは遠慮するので、断れば断るほど食事を足してやるのがいいんだと言ってご飯を足すように母親に促した、という話から窺えるのは、G先生がプラジャの遠慮、恥の感覚を理解し、それに則り、物のやりとりを村人たちとしていた、そしてそれが村人たちにも広く認められていたということである。

では、もう一方の後任サールたちは、どのような感覚で村人たちから野菜などを無心していたのだろうか。あるサールは、M村のある男性から知人に穀物を売ったのにいつまでもお金を支払ってくれないがどうしたらよいか、という相談を受け、このように話していた。

買ったものはきちんと払わなくてははいけません。1食分くらい分けてもらった食べ物は仕方ありませんがね。私たちだって、食べるものがなくなったら、お腹を空かせているわけにはいかないの、どこかに貰いに行かなくてはなりませんし。でもお金の問題は別です。

この発言をそのまま受け取れば、1食分くらい分けてもらったものに代価は必要ない、食べるものがなくなったら貰うのが当然ということになる。そして、それは彼が日頃村人たちに野菜などを無心している態度とほぼ重なっていると言える。彼はこの村で自らを弱者として捉え、援助を求めているということなのかもしれない。そんな弱者だから返礼は不可能だし、必要ないということなのかもしれない。もちろん、このようなごく限られた資料だけで、それらの判断をおこなうことはできない。だが、その自分をM村のなかの弱者として捉えているかもしれない人は、村人から見れば間違いなく高給取りであり、裕福な存在である。現金収入だけ比べれば、サールたちの2, 3ヶ月分の給料は、この村のほとんどの家族の年収を越えてしまう。そのような状況は、多くの村人たちが理解している。

また、細かい収入の状況を知らなくても、一般にバザールの人たち（学校の教員はほとんどがバザールに家を持っている）は、パハード（山地）の人に比べて金持ちとして見られている。バザールから来た人たちと、以下のようなやりとりが筆者の前で繰り広げられたことがある。

近隣のバザールからM村を訪れた商人がある家に立ち寄って商売の話をした。そして、雑談をしながら、スルティ (surtī N. 自家製のタバコ) を分けてくれと言った。それに対して、その家の女性はこう答えた。「私はスルティを吸わないから持っていないし、この家で吸う人は今外出していてどこにあるのかわかりませんよ。大体、あなたたちのようなバザールの人が、私たちのような者に貰ってタバコを吸おうなんて、おかしいわ。私たちにくれると言うのならわかるけど」。

M村に選挙活動に来たあるプラジャ男性にバザールから来ていた商人が、彼にスルティを持っていないかと訊いてきた。彼はスルティを手渡ししながら、「あなたのようなバザールの人自分たちのような者から、物を貰うなんて、罰 (pāp N.) が当たりますよ」と言った。

実際の負担はともかく、このような「金持ちのバザールの人」が「貧しいパハードの人」から何か貰おうとするのはおかしい、という言葉はM村で頻繁に聞かれた。そのなかで、バザールに家を持つ人、それも給与生活者が食物を求めて歩いていれば、かなりの人に抵抗感や違和感を与えることになるのではないだろうか。

後任サールたちの物のやりとりに違和感を感じ取る村人たちは、サールたちのそうした感覚をチュチョだと言い、彼らのなかの一部の人たちの高位カーストという出自〔バフン（ブラーマン）・チェットリ（クシャトリア）〕と結びつけ、「バフン・チェットリは、バトだがチュチョだ」などと続けて話す。また、プラジャの男性であっても話し方に違和感があれば、「彼は、バフンのようにチュチョな話し方をする」などの言い方もする。「バフン」というカースト的出自とチュチョという性格は、様々な場面で結びつけられ語られるのである。

ある30代の男性は「プラジャとタルーは、愛情に溢れてソージョ（sojho N. 誠実な、正直な）だけど、それ以外の民族は、何かくれると言っても口だけだ」と言いつつ、つぎのように話を続ける。

バフンはチュチョだ。大臣も首相も皆バフンだし、バトはバトだけど、本当にチュチョだよ。以前バザールに用事があつて行ったとき、バフンの家で食事をしたんだけど、食べ終えたらすぐに自分が座ったところ（土間）の土を塗り直したんだ（おそらく穢れを清めるため）。だから、今でもバフンには怒っていて、水もやらないんだ。

このように食べ物のやりとりだけでなく、カースト的な生活感覚から違和感、嫌悪感が立ち上がることも多いようである。そうした違和感もチュチョという言葉で表現される。

だが、そのような見方に対する、若者のつぎのような話もある。

バフンも人によってはジャッティだよ。先日もコメのご飯を出してくれただし、人によって違うよ。

このように単純にバフン＝チュチョだと村人すべてが考えているわけではないし、現実に村の人びとはバフンやチェットリでも、様々なバザールの人たち、商店主たちと親交を深めているのが実情である。ただ、政府によって派遣された後任サールたちとの出会い、また、バザールが広がり新しい人との出会い自体が増えていくなか、様々な違和感が生じ、それに説明を当てていくなかで、民族についてのステレオタイプ化した言説が広がりを見せていることも、また確かなのである。

後任サールたちに対する評価の言葉には、チュチョ以外に、もう一つ頻繁に出てくる言葉がある。それは、ロクガルマイ（rok gar may P. 話したが屋、お喋り）である。

それは、ある後任サールが下宿先の筆者を訪ねてきたときのことである。そのサールは、下宿先の家族への挨拶もなく日本人はいるかと尋ね、筆者のいる穀物小屋に来



た。そして、しばらく日本の話を聞いたあとに国家体制や政治制度の話（民主化後に多くの人が興味を示していた）をひとしきりして帰っていった。筆者が出ていくと、そこにたまたま居合わせた男性がこう呟いていた。

鼻が高いのは、ロクガルマイだ。

このようなロクガルマイという言葉は、村の外からやって来たサールたちにはよく用いられる。また、ラジオのニュース解説などを村人たちが聞き、その解説者に対して「こういう人たちは、ロクガルマイだね」と半ばあきれたような口調で言うのも何度か耳にしたことがある。

ロクガルマイというのは、どちらかと言えば否定的に用いられる傾向があるが、よく話す人がすべて否定的に捉えられるわけではない。他にロクサ・ミヤント (roksha myhanto P.) という表現があり、これは「客人などに対して面倒がらずによく話してくれる」という意味合いになる。

ヒラ氏と一緒に交易に出掛けたタルーの村で、ヒラ氏のミート（儀礼的な兄弟関係を結んだ人）にあたる男性の妻が、筆者たちが果物を持って到着するとすぐに水、タバコ、ロクシ（蒸留酒）、マメなどを出してくれ、しばらく世間話などをしながらもてなしてくれた。その対応を評してヒラ氏は「彼女は、ジャッティで、ロクサ・ミヤントだから、この家にはつい立ち寄りたくなるし、交易でも余分に果物をあげたりするんだ」と言う。

このように、よく話をして、相手をしてくれる人にはロクサ・ミヤントと言ひ、よく喋るといっただけでなく、相手に関係なく1人で延々と話す人はロクガルト、ロクガルマイと表現されるようである。

一方の「鼻が高い」というのは、バフンやチェットリに結びつけられ語られることが多く、鼻が高い子供を指して、「この子はバフンのように鼻が高い」と言われることがある。また、「鼻が高いやつ」というかたちで、バフン・チェットリのことを指す提喩的な用法も見られる。

ある儀礼がM村でおこなわれたとき、ロクシを売りに来たタマンの女性にM村の人たちはアムを盛んに勧めていた。この女性は、M村のある女性とミートの契りを結んだ義理の姉妹にあたる。その女性が、おかずを遠慮して食べないのを見て、周りの人たちは「鼻が高いのも食べたのだから、あなたも遠慮せず、食べて下さい」と、あるバフンの男性がその家で食事したことを取り上げて説得していた。

これは、バフンの客も食べた、だから穢れた食べ物ではないし、食べるのを怖れる必要はない、という文脈で言われていたようである。その他に、駈け落ちした女性の夫（プラジャ）を評して、「彼の鼻は高かったけれど、ラタ（愚鈍な）のようでもあったから、嫌になって出て行ってしまったんです」と言われることがあった。このように鼻が高いのは、一般に容姿の評価としては「良い」ことになり、また容姿が良い

のを「バフニ (bāhunī N.) のようだ」と逆に言うこともある。

サールたちとの新たな交流が広がるなかで読み書きの能力や知識は広がっていき、同時に自分たちとの違い、「文化的」差異にM村の人びとは日々直面するようになった。そして、それについての言説は徐々に固定化してきているように思われる。

こうした言説を簡単な図式にまとめてみると、以下のようになる。

プラジャ	/	バフン・チェットリ
タルー		
G先生	/	その他の先生
気前が良い、ソージョ	/	ケチ
(よく喋り相手をする)	/	ひとりでよく喋る
(鼻が低い)	/	鼻が高い

このような差異の積み重ねのなかで、それが徐々に二項対立的な図式になりつつあるのがわかる。鼻が低いなど(カッコ)に入れた部分は、実際対立的に語られているわけではないが、気前が良いということと、ケチであるという言説を合わせたときには、プラジャ・タルー対バフン・チェットリという二項対立に陥っていると言える。それが容姿などの身体的特徴の差異、対立と結びつけられれば人種主義的な様相まで見せる。このような一枚岩的な二項対立的図式は、開発や教育などの制度を受容する人びとのサールたちに対する違和感の訴え、抵抗の訴えにより、形成されていることがわかる。

いずれにせよ、学校のサールたちは単にチャラーク(賢い)でブッディ(知性)があり、人びとをより大きな知識や高学歴という社会的地位へと招いていくだけでなく、チャラークな分、ケチで、人の話を聞かずによく喋る、そのような両義的な存在へと変化してきていると言える。

## 2-9. 人びとによる人びとのための開発

プラジャ開発委員会が解散し、新たに「人びとによる人びとのための開発」を目指したプラジャ能力開発プログラムが始まった。新しいサールが訪れることになったのである。外国からの援助団体とネパールのNGOとの共同でプラジャのエンパワーメントを目指すことになった。

このプログラムについては、ラジオでも何度か放送されたため、多くの人が新しい開発エージェントが来るまでに、それについての情報がある程度得ていた。特に予算については関心を呼んでいたが、この時点で「どうせお金(開発の予算)が来た、(エージェントが給料としてそれを)食べた、それで終わりだ」と言い、開発には期待しない、という人が少なからずいた。この新しい開発がやって来た1995年頃には、それまでの経験から開発は役に立たないという失望感が村人たちのあいだでかなり広がっているようだったが、それでも比較的学歴の高い男性のなかには、職を得るチャンスになるかもしれないと、早速バザールに様子を窺いに行く人もいた。

具体的なプログラムが始まる前、ネパール人スタッフが現地調査に訪れ、やがて開発のサイトと事務局の設置場所が決められた。そして現地で仕事をする開発スタッフも公募で選ばれた。大学に通うプラジャの女性もそこに含まれていたが、高校卒業資格試験に合格していない村の青年たちは採用試験を受けることもできず、村では失望感が広まった。そして高校まで進学した、村で最も学歴の高い青年たちが、採用の問題から反感を抱き、「自分たちにはこの開発は役に立たない」と言って村を廻るようになった。

やがてプロジェクトの実施場所が決まり、スタッフの配置も決定されて、開発の具体的なプログラムが始まった。まず、スタッフが揃ってプラジャの村々を巡回し、「人びとによる人びとのための開発」の目的や手法を紹介した。スタッフは、それについてまず演説で説明し、さらにわかりやすく伝えるために寸劇を披露した。その寸劇を筆者は観ることができなかったが、プラジャに扮したスタッフが、プラジャの暮らしはこんな風に変だ、こんな苦勞(ドウッカ)があるということを演じたものだった。それを観たM村の男性たちは、数日後このような印象を語っていた。

バザールでチラッと見たんだけど、私たちのことをチェパンと呼んで、馬鹿にしていたから、頭にきてこの村に来たときには劇を観に行かなかったよ。

プラジャの暮らしはこんな風で、これからビカース（開発）しなくてはならないって言っていたけど、何をする開発なのか訊いても「これから調整して決める」って言うばかりできちんと答えないし、あれは何でもないな。

自分たちの暮らしがどんなものなのか、自分たちが一番よく知っているのに、何でそれを劇で見せられなくてはならないんだ。あれは役に立たないよ。馬鹿にしているんだ。

このような否定的な意見が相次いだ。

一方、好意的に捉え、劇を楽しんだ人も何人かいた。ある10代の青年が言う。

歌をうたっていて楽しかったよ。この村の爺さんたちは、彼女たちの声はここの女たちほど良くないねって言っていたけど。

高校にまで進学した青年の何人かは、なぜ事務局を現地に設けずに国道沿いの街に設置するのかとスタッフに詰め寄った、と言う。ある青年は、それに対して「開発プログラムを施行する村はいくつもあって、そのなかの一カ所に事務局をつくれば、他の村からクレームがでるので、そうならないように現場の外に設置したのです」と答えられたそうである。

その後、これから村で調査を始めると言っているスタッフにプログラムの趣旨や方法について話を訊く機会を得た。

開発スタッフ（以下S）：「このプロジェクトの目的は人びとをエンパワーすることです。そのためにグループをつくってもらい、自分たち自身でプログラムをつくることができるようになってもらう。それを目標にしています。そして、タト（tātho N. 抜け目ない）やバト（利口な）だけではなく、話ができない人のこともしっかり考えていきます。PRA（Participatory Rural Appraisal：参加型農村評価）という方法を用いて、そのような人の自分の考えも聞き出していきます。そして、ひとりだけでなく、沢山の人の話を聞いていきます。これは大変難しいことですが、人びとがその趣旨を理解してくれたら、大変よい結果を生み出すはずですが、これからこの人たちにとって何が本当に必要なのか、それを調べ、個々人でできることは何か、グループでできることは何か把握していきます。そして、いつ、誰の利益のために、どのように進めていくべきなのか、考えていきます。」

筆者：「この人たちに何が本当に必要なものなのか、人びと自身から聞き出すのは難しいことではないですか。」

S：「ですから、ゆっくり慎重に進めていきます。そのために小さなグループをつくってもらうのです。与えられるのではなく、この人たちが自分たちでやるべきことを見つけ、それを実行していくのをこちらは手助けするということです。そのために、問題になっているのは何か、なぜ駄目なのか訊いていきます。」

こういった趣旨については、すでにラジオや最初のプログラムで紹介されていたが、M村の元村議のひとり「人びとによる人びとのための開発」という話を聞き、こう嘆いていた。

自分たちの考えを取り出して、開発を進めると言うが、考えられることはもう自分たちでとっくにやっていますよ。必要なのは、新しいことなんだ。そんなことを言っているようでは、こちらが新しいものを欲しいと言っても、どうせ何もくれないでしょう。

数日後、別のスタッフがM村を訪れ、会合が開かれた。各家から必ず1人以上、できたら女性も来て欲しいと呼びかけられ、学校の敷地に村人たちが集まった。当時61家族からなっていたM村の20人前後の男性が集まり、数人の女性も加わったところで、スタッフは村人たちにこう切り出した（以下Sは開発スタッフたちの発言、Mは村人たちの発言）。

S：「この村の主な問題点は何でしょうか。こんな仕事をプラジャ・ビカーズがしたらよいと思うことを言って下さい。」

M：「政府の村の予算がワード（区）ごとに分けられているのを、違うワード同士が共同で使えるようにして欲しい。それができたら別のワードと共同で予算を合わせ、橋と水田の水路を造りたい。この村の61家族中、

40 家族ほどの水田に関わった話です。」

S : 「皆に関わるものが良いでしょう。」

M : 「それなら皆にヤギをくれたらいい。」 「貧しいものも金持ちも皆で飼えばいい。」

S : 「他に何か。」

M : 「色々ある。」 「電気が来ればよいし、道路ができれば……。」

S : 「収入が少ないのに電気が来ても問題が出てきますよ。」 「道路もできればよいというものではありませんよ。ムグリン (Muglin N. : 地名) の近くで国道から近いプラジャの村では生活が良くなっていないし、ミカンで有名なシャドウル村は国道からは遠いんですよ。」 「暮らしの上で大変なことは何かありませんか。」

M : 「タダで、勉強のできる生徒を S L C に合格するまで学校に行かせてくれればいい。」

S : 「教育上のことは政府でないとできないですよ。」

S : 「他にまだ話していない人はいませんか。」

M : 「ニワトリが欲しいと言っても駄目だろうし……。」

S : 「ヤギはどうやって飼っているんですか。」

M : 「鉄の柵を作ってそのなかで飼えばいいけど、それができないから森で放牧しています。それで果物の苗は食べられてしまうので、植えてもなかなか上手くいきません。野菜くらいだったら上手く場所を確保すれば何とかなるかもしれませんが、やはり土地が少ないので難しいでしょうね。子供の健康のことで何か援助してもらうのはどうでしょう。」

S : 「子供の保育の問題ですか？何か子供の教育で問題があれば、計画を考えることもできますが……。」 「水田の水路のことと、ヤギの飼育の問題が出ましたが、どちらが一番の問題なのか選んで下さい。」

M : 「一番利益になるのはヤギですね。水路に関しては皆が皆水田を持っているわけではないので、一部の人の利益にしかありません。」 「ヘルスポストをこのワードに置けたらいいのに。」

S : 「それをしたら数が多くなりすぎて、大変になりますよ。」

M : 「養蜂も良いと思うけど。」

S : 「3 つになりましたが、どれかひとつ選んで下さい。」

M : 「ヤギの飼育ですね。タダでくれるのですか。私たちが借金して導入しなくはならないのですか。」

S : 「借金ということにはならないけれど……。」

ここで村人のあいだから「開発の予算は、この人たちの給料で削られて、足りなくなっているんだ」との声が聞こえる。

S : 「それでは、ヤギの飼育がなぜ必要なのか。今どこが問題なのか、皆で話し合しましょう。」

M : 「ヤギの飼育が必要なのは、今それで収入になっているからですよ。糞も肥料になるし。」

S : 「ヤギの飼育ができないことで、何が問題になっているのですか。」

- M: 「ヤギが病気になるのが問題です。」
- S: 「ヤギが飼えないのが問題なのか、ヤギを飼う上で問題があるのか、どちらなのですか。」
- S: 「どんな問題があつてヤギを飼うのですか。ヤギを飼いたいのはなぜなのですか。」
- M: 「収入がないからですよ。お金がないから、収入になるヤギが欲しいのです。お金がないのです。」
- S: 「それでも穀物は沢山あるでしょう。でも収入がないのが問題なのですね。」
- M: 「私たちには問題はいくらでもあります。服を買うのも大変だし、どこかに出掛けるのも大変。全部が問題なんです。その問題をどうすればいいのか、あなたたちが何か言って下さいよ。そのためにここに来ているんでしょ。」
- S: 「それなら、まず問題を全部あげてみて下さい。」
- M: 「水路、茅を取りに行く道の整備、養蜂、ヤギの飼育、食料の不足……。順番をあげれば、1 に水路、2 に食糧の不足、3 にヤギの飼育、4 に道の整備ですね。」「竹を植えずにはいけないという問題もあります。」
- S: 「それはなくて問題なのですか。それとも、竹を植えたいということなのですか。」
- M: 「機械を持ってきてトレーニングをしてくれたらいいのに。」
- S: 「これまで話してきたなかで何が問題なのですか。」
- M: 「ヤギと食糧の不足です。そう、食糧の不足ですよ。」
- S: 「なぜ、食糧の不足が問題なのですか。」
- M: 「食べ物がなくなるから問題なのですよ。」
- S: 「ヤギはどうですか。」
- M: 「お金がないから買えないのです。だから収入も増えません。肥料も足りないし……。」
- S: 「水路と収入のどちらが問題なのですか。」
- M: 「水路ですよ。水路ができたら、収入も増える。」
- S: 「収入には、どんなものがあるのですか。穀物からの収入とか色々あるでしょう。」
- M: 「あなたたちが言って下さいよ。私たちに聞いてばかりで。自分たちには、収入の問題が何なのかわかりません。」
- S: 「収入源のことですよ。」
- M: 「私たちは、水路が欲しいのです。それが駄目なら、何もありません。今まで開発が来てミカンも植えたし、ヤギも持ってきました。でも全部駄目です。何もありません。ヤギも1, 2頭改良品種を持ってきて、それで終わりですよ。タダでくれるわけでもないし、開発の役人たちは私たちプラジャにヤギを与えたらすぐに食べてしまうから駄目だ、と言ってヤギを私たちの手に渡しもしないのです。」
- S: 「何が一番問題なのですか。」

M：「皆同じくらい大事な問題ですよ。」 「収入です。」

別の村人から「何で収入の話をするんだ」という声。

S：「収入の話をしたら、水路を造らないことになるわけではないから心配しないで下さい。」

M：「あなたたちは私たちが、ヤギが欲しい、と言ったらそれは問題ではないと言うし、養蜂も問題ではないと言うし、一体何を言わせたいのですか。」

話が紛糾し、開発スタッフは筆者に相談を求めて来た。筆者は、村人の言うことを否定することで反発されているようだから、とりあえず否定は辞めて村人の話をすべて聴き、それから話をグループ化して、村人たちと一緒にまとめていけば良いのではないかとアドバイスしてみた。

結局、その後の話し合いで、一番の問題は食糧の不足で、その原因には、肥料が足りないこと、水路がないこと、土地が足りないこと、肥料を雨が流してしまうこと、穀物の管理がしっかりできないこと、農業の技術が低いことがある、という方向に議論は進んだ。

S：「では、なぜ肥料が足りないのですか。」

M：「家畜が少ないからです。」

S：「なぜですか。」

M：「お金がないからですよ。お金を稼ぐ手段がないからです。勤めに就くこともできないし、収入が少ないのに出費は多いのです。作物の収穫は少ないし・・・。」

S：「なぜ収穫を増やせないのですか。」

M：「肥料が少ないからです。それに土地も少ないので。」

S：「なぜ土地が少ないのですか。」

M：「山の崩壊が起こっているからです。それで、土地が少なくなっています。」

S：「なぜ山が崩壊するのですか」

M：「それは、そういう気候だからです。雨季の雨ですべて流されてしまうのです。肥料も。」

横から「これから木を植えなくてはならないって言うぞ」との声。

M：「それに人が増えたから土地が少なくなったのです。」

S：「なぜ人が増えたのですか。」

M：「それは、男と女が・・・（苦笑）。」「子孫が増えたからです。」

ここではじめに議論に積極的に加わっていた人たちは、何をやりたいのかわからない、自分たちを馬鹿にしていると言い、帰ってしまった。

S：「なぜ雨が肥料を流してしまうのですか。」

M：「それはこの村が山の上で、畑が斜面になっているからですよ。」

- S : 「それでも、なぜこういった山で暮らし続けるのですか。」
- M : 「ブッディ (知性) がないからですよ。」
- S : 「昔は土地も広くて森のものを食べ、ヒエを播いて食べていけたからでしょう。」「他のところでは、山でも肥料が流れないように上手く工夫して、収量を上げているところもあります。なぜ上手くできなかったのでしょうか。」
- M : 「怠けていたからです。」  
「食べるのに精一杯だったからです。」
- S : 「やり方がよくわからなかったのではないですか。」
- M : 「そうですね。教えてくれる人もいなかったし、穀物の管理がきちんとできていなかったからです。」
- S : 「食料が不足すると、何が起こりますか。」
- M : 「お腹が空いて病気になります。子供も学校に行けなくなります。それでブッディもなくなるし、お金を稼ぐこともできなくなるのです。」
- M : 「それと、穀物を買に行かなくてはならないし、賃労働に出なくてはなりません。」  
「お腹が空けば仕事もできなくなるし、病気になるとお金が掛かり、借金しなくてはなりません。」
- S : 「それでは、お金を持ってきたほうがよいでしょうか、それとも技術を教えたほうがよいでしょうか。お金は使えばすぐになくなってしまいますが、技術は身につければずっと役に立ちます。」
- M : 「技術が必要です。」

その後、話は、肥料の作り方のトレーニングをおこなうこと、肥料が流れないように畑の隅に草を植えることでほぼまとまり、ミーティングは終了した。早速スタッフは村内に土の流出を抑え、よい肥料にもなるという植物の苗床をつくり始めた。こうして開発に対してすでに期待していない村人たちや、期待するがゆえに思いどおりにならず反発する村人たちとの軋轢を抱えながらも、村のなかにある「問題」がいくつか浮き彫りにされ、開発プロジェクトはスタート地点に立った。スタッフたちの熱意と村人たちの将来への希望が、その後のプログラムの展開によりどう変化していったのか、M村をあとにしてから追跡できていないが、プラジャ能力開発プログラムは現在も継続されているようである。

さて、ひとつ確認しておきたいのは、本章の議論の目的は開発の是非や手法の分析をおこなうことではない、ということである。ここでは、こうした新しい開発が村人たちにどのようなものとして想像されているのか、ということをはっきりとすることが目的である。

その観点から気がつくのは、人びとのなかにある「開発は与えられるもの」というイメージの存在である。それはプラジャ開発委員会設立時からの旧来の開発が前提としてきたものである。開発は、国王から、政府から、あるいは外国政府から開発の対象である人びとに与えられるもの、というイメージがある。

新しい開発は、それを覆すことを目指している。与えられるものではなく、自ら考



え問題を見つけ出し協力し合っ問題改善していく、という方向に開発の向きを変えようというわけである。これにより、開発エージェントは、何かをもたらす媒介ではなく、人びとが何かをおこなうのを手助けする、言い替えれば、自立を援助する後援者、あるいは人びと同士を繋げるファシリテーターになる。

だが、そうした開発のイメージを変換することがいかに困難なのかは、上のやりとりを見れば明白である。与えるのではなく、自分たち自身で問題を見つけ、解決していくのだと言っても、村人たちからは「～がないのが問題だから、～が欲しい」という従来の開発に対するものと同様の要求が、トートロジカルなかたちで上がってくるばかりである。それを否定すれば、村人たちに「もう与えないのか、与えないでその金は何に使うのか」という疑問を抱かせ、「それはおまえたちの給料だろう」ということになる。確かに開発は、莫大な予算が組まれながらも、その予算の多くが開発スタッフの人件費で使われてしまう、という構造的な矛盾を抱えている。そして、その矛盾に開発に慣れた人びとはすでに気がついていて、また、従来の開発に比べて準備や聞き取り調査を丁寧におこなう分、そうした人件費が膨らんでしまうという問題もある。

また、「自分たちで考え、問題を見つけましょう」という開発の呼びかけは、「あなたたちは考えていない」ということと「あなたたちの生活には問題がある」ということを前提としてしまう。ましてや、それが特定の民族名をあげての呼びかけなら、あなたたちの民族は考えていないし、生活に問題を抱えている、という言葉に暗に投げかけているということになる。そうした問題が表面化したのが、最初の寸劇だと言える。

何も言わずにただ与えてくれていた国王に対しては、「私たちが愛してくれた」だとか「私たちが哀れんで援助してくれた」などと言っていたM村の人びとだが（開発スタッフが給料でそれを「食べて」しまうという批判はあったが）、新しい開発に対しては「私たちが馬鹿にしている」、「彼らは役に立たない」という評価を与えている。それは、上に述べた前提を敏感に感じ取る人たち、特に、村でもバト（利口な）と言われる人たちであり、村の外でショーたちと交渉できるような人たちに顕著だった。一方、普段からほとんど村を出ない女性たちは「私たちはよくわからないから」と言い、特別な関心を寄せていない様子だった。ただし、そうした女性も他の男性たちと同様、開発スタッフの滞在の際、食事などで所作などの違い（遠慮しないこと、食べ物を分けないことなど）を感じると、あとで家族や近所の人にそれを訴えることがある。

昨日、穀物倉（スタッフたちが、寝泊まりのために借りた）にショー（面と向かったところではサールと呼ぶ）たちの様子を覗きに行ったら、自分たちだけでおやつを食べていて、私たちには何もくれなかったんですよ（その後くれるようになった）。

もちろん、こうした衝突や違和感を訴えることもなく、あるいは訴えながらも、夜ともに歌い楽しんでいた人たちも大勢おり、親密な交流も進行していた。

新しい開発のサールたちに対する反応は、このように様々であったが、ここまでの

議論から見えてくるのは、旧来の開発では自らに援助を与える者を見上げている状態、あるいは、差し出される援助に手を延ばし受け取っていた状態だったのが、新しい「人びとによる人びとのための開発」では、その与える者のいる場所に、つまり開発の主体としての場に入びとが招き入れられるようになった、ということである。だが、招き入れられ、すぐにこれまでとは異なった方向に進んでいけるのかと言えば、それはそう簡単なことではない。現金収入を増やそうと言っても、そのための生産物の販路も容易にはできない。

もうひとつ見えてくるのは、新しい開発の呼びかけが人びとの「プラジャ」としての意識に訴えかけるということである。その呼びかけは、人びとに自らの問題を探らせたり、何か欠如した存在として捉えさせようとする。人びとはそれに反発しながらも、開発の波に乗れない自らの状況に気がついたとき、そのような欠如イメージを自らのものとして受け入れる。

新しいプロジェクトに批判的だった青年が、開発スタッフのひとりにサールと呼びかけて訊く。

シャドウル村ではあんなにミカンができて、そのプラジャたちはやっぱりガリブ (garib N. 貧しい) です。どうしてでしょう。場所のせいじゃないとすると、ブッディがないからですかねえ。

スタッフは答える。

だいたい場所のせいだし、トレーニングしてくれる人がいないからですよ。だから、これからトレーニングすれば・・・。

このように、プラジャはブッディがないとか貧しいという見方が、新しい開発やバザールの進展などを通して、より強化されているように見える。

バザールのサウ (商店主) たちのポッキキム (セメントの家) の話から、

R氏：「なぜ自分たちの民族は貧しいんだろう？」

H氏：「それにプラジャで商人になるのは、いないしね。」

S氏：「そう言えば、親戚のS姉さんはバザールの近くの村で、店を出していたんじゃない？」

H氏：「ああ、言われてみれば、そうだ。彼女はチャラク (賢い) だから。でも、確かもう店は閉じてしまったよ。やっぱり、プラジャは役に立たないよ。他の民族はブッディがあるから、金持ちになるんだ。」

R氏：「農民でも他の民族は金持ちがいるしね。チトワンには農民だって、ものすごい金持ちがいるよ。」

H氏：「やっぱり、パハード (山地) だから駄目なのかな。」

R氏：「パハードだって、あの山の向こうに暮らすバフンで金持ちがいるでしょう。」

H氏：「プラジャは怠け者だから駄目なんだ。」

S氏：「そんなことはないわ。自分たちはずっと一年中暇なしで働いているじゃないの。でも、どんなに働いても食べるのにやっと。バザールのサウミたいに何もしないで座ってなんかいられない。24時間働きっぱなしよ。」

R氏：「バザールのブラーマンたちだってチャラクだから、自分たちよりももっと働く。」

その後、村のある女性が開発援助プログラムの女性委員に選ばれたことを知り、つぎのような話を上のR氏がする。

この村の女性にトレーニングをしても村の誰もその人から技術を習おうとしないから、何の役にも立たない。バザールの女性開発委員はとてもチャラクで、何でもよく習い覚えてしまっすごい。民族が混ざっているところはチェエバン（プラジャの人びとが卑下するときに用いる自称）でもチャラクになるから。ここはチェエバンだけで駄目なんだ。チェエバンはラス（恥ずかしがって）で役に立たない。

また、自分たちがいつまでたっても貧しいことを嘆きながら、高校まで通った若者が、バザールの人びとのようにこんなことをこぼす。

私たちの祖父、曾祖父の代まで皆アルチー（alchi N. 怠け者）で農業もろくにしてくれませんでした。ジャンガリ（野人、未開人）だったんです。だから、今でも貧しいんです。

新たな開発が進展し、開発の対象である民族はなぜ貧しいのか、なぜ進歩しないのか、といった問いが日々あちこちで発せられる。

開発関係のミーティングのあと、数人の男性が家で集まり話をしていた。そこに筆者が立ち寄ると、いきなり質問された。

なぜ私たちのような貧しい民族は、いつまでたってもずっと貧しいんでしょうか？

その根底に社会構造の問題があることを開発者は明かさないうまま、人びと自らによる原因究明や、反省を求める。そのなかで民族の枠組みの固定化がさらに進み、ブッディがない、などという能力の欠如に関するステレオタイプが、人びと自身によって導入され、それが他の民族との比較を促す。

プラジャ	／	バフン・チェットリ
ラタ	／	バト
	／	チャラク
ブッディがない	／	ブッディがある
恥ずかしがる	／	恥ずかしがらない

恥を知る



恥知らず

こうした比較分類は、他の文脈でもある程度見られただろうが、それが新しい開発により強化されているのは間違いない。旧来の開発では、この人びとの「貧しさ」の原因究明は開発者の問題であり、人びとはそこに関与せず（「排除」され）、一方的に開発を贈与されていたからである。

だが、新しい開発では人びと自身に原因究明（参加）が求められる。そしてその原因を明らかにし、それを改善するための活動に予算が配分される。

こうして、民族の枠組みが強化され、民族についてのステレオタイプが広がるのと同時に、開発者から見つめられ、それを見上げていた人びとは、自らを見つめ返すようになったのである。

## 2-10. サール：媒介から鏡へ

サールは、学校の教師にしても、政治家、開発スタッフにしても、当初は国家や開発と人びとの中間に位置する媒介としての色が濃かった。それは、階層化された世界を想像させ、人びとをそのなかに位置づけてきた。

ところが時代が進むにつれてサールたちが抱える村人たちとの生活感覚の差異が浮き彫りになっていく。その差異に説明があてがわれるなかで、恥を知らないサール、お喋りなサールといった批判がなされ、それが「バフン・チェットリ」などの民族的な枠組みに変換される。そして、同時に「自分たちプラジャは恥を知り、愛情に満ちソージョ（誠実な）で一方的に話さない」と語られるようになる。また、生活のなかで自らが躓いたときには、駄目な自分たち、ラタ（愚鈍な）でブッディ（知性）がない自分たちという説明のなかで、そうした事例が「プラジャ」という民族の枠組みのなかでまとめられ、それに対するバト（利口な）でブッディのある民族、「バフン・チェットリ」が想像される。

こうした往復のなかで、経験される出来事が想像と交錯して想像に経験的な実感が与えられ、「プラジャ」対「バフン・チェットリ」という二項対立が完成する。

+

ソージョ

愛情に満ちた

恥を知る

小さな声で話す

話ができない

山の住人

農民

ラタ

-

-

チュチョ

欲しがることができない

恥を知らない

やたらと話したがる

話ができる

バザールの住人

商人

バト

+

このなかでは、サールたちについて語ることは、自らを語ることになり、自らにつ

いて語ることはサールたちについて語ることになる。このような二項対立のなかで、人びとの眼差しは、先へと進んでいくのではなく、鏡に突き当たり、自らを見つめ返すようになる。サールの世界は、チョールの世界のような階層化された世界を根本としてはいるが、その階層が褶曲し、層が相互に鏡のようになった閉じた空間になっているのである。

このサールの世界で最終的に浮かび上がってくるのは、話ができず、山に住み、農民であるが、愛情に満ち、恥を知った者の姿であり、そのような両義的な「プラジャの存在イメージ」ということになるだろう。

## 注

<sup>1</sup> あだ名はジャパニ (jāpanī N.) から転じてジャパン (japan) となった。この村の長老スダムシン氏にそう呼ばれ、それが広まったのである。住み込み調査を始めた頃、日本がどこにある国なのか説明する機会が多かったこともあり、覚えやすい名前だったのかもしれない。当初はジャパニと呼ぶ人もいたが、他の人にジャパンというあだ名なんだと訂正された。

ある日、ひとりの女性がジャアパンと呼ぶのに近所の人気がつき、なんでそう呼ぶのかと訊いた。彼女の答えは「ジャア(トラ)だからジャアパンって言うんじゃないの？」だった。そう考えると「プラジャ」と言うときのジャもジャアと発音されているように思えてくる。今後確認が必要だが、音韻の側面から「プラジャ」と「ジャア」のイメージの交錯が起こっているかもしれない。

<sup>2</sup> この裏で、プラジャの人びとも自分たちの開発援助プログラムを設けるよう、カトマンドゥのネパール政府に直接働きかけていたらしい。マクワンプル郡の人びとのそうした動きについて、長年「チェパン」の研究に携わるトリブヴァン大学の Ganesh Man Gurung 氏から個人的に伺った。ピスタ (1982 : 199 (1967 : 106)) も「チェパン族」の若者が開発に興味を持ち始めていることを記している。

<sup>3</sup> Rai の原文では Kumhal となっているが、表記の統一のため本稿では、Kumal とした。

<sup>4</sup> 「クイ」には、勝手に持っていくこと、あるいはそういう存在、泥棒に近い意味合いがある。例えば他人の妻を横取りして連れて行くことを、モムツォ・クイティ・アロ (momco kuyti alo P.) などと言う。